3

先端基礎研究センター設立30周年に寄せて

前川禎通（理化学研究所・創発物性科学研究センター）

私は2010年4月から2018年3月までの8年間、先端基礎研究センター（先端研）のセンター長（4代目）を務めさせていただきました。就任当初は「原子力ルネッサンス」と言われる時代で、先端研は将来の原子力の新しいフェイズに対応できる「先端的な基礎研究を行う」ことを目的としており、周りからも大きな期待を感じました。ところが、2011年3月11日（金）に起きた「東日本大震災」でその基盤が大きく揺らぎました。この様な未曾有な災害が目の前にあるのに、基礎研究を続けていて良いのか、そもそも原子力機構にとって先端研は必要なのか、という厳しい意見が出され、先端研の存続が危なくなりました。

科学技術は、私たちの夢を実現し生活を豊かにするプラスの面と同時に、負の側面も持っています。原子力機構では、この日を境に科学技術に対する見方が大きく変わってしまいました。震災復興と福島の除染という目の前の問題を解決することが原子力機構の喫緊の課題となり、先端研でも多くのメンバーが福島の除染や震災を受けた方々へのサポートに尽力しました。当時のメンバーの方々の復興への真摯な取り組みを思うとき、今でも目頭が熱くなります。

一方で、未来のために基礎研究を続けることも重要です。基礎研究は一度途絶えると簡単には元には戻せません。このことを訴え続け、先端研のアクテビティを維持することに奔走しました。幸いにも文科省と原子力機構の中枢部の方々のご理解を得て、先端研を維持することができました。先端研のメンバーの方々は震災復興と福島の除染の厳しい仕事をこなしながらも日々の研究のペースを落とさなかったことは当時のセンター長としての私の誇りです。

私は2011年3月14日（月）―16日（水）に先端研で国際会議の開催を予定していました。そのため、11日にはすでに数名の外国人の参加者が東海村に滞在していました。幸いにも地震が午後（14時46分）だったため、彼らは先端研に来ており災害は免れました。また、地震の直後にアメリカからの参加予定者の一人から電話がかかってきました。彼は、私たちが無事であることを確認し、国際会議を延期する旨を海外の出席予定者全員に電話で連絡してくれました。なお、一年後に、同じメンバーで同じプログラムの国際会議が開催されたことは感激でした。

以上のような大きな荒波を乗り越えて、今回先端基礎研究センター設立30周年を迎えたことは感慨無量です。私は、先端研は原子力機構の未来を指し示す「水先案内人」の様な存在であるといってきました。是非これからも原子力機構の先頭に立って、原子力機構の研究を引っ張っていっていただきたいと祈念しています。